

by 村上博美 さくら インタビューシリーズ



坂井滋郎氏

坂井滋郎氏は北大、MIT、ハーバード大学を経て、ケンブリッジ大学にて博士号取得。現在、米国医療食品管理局(FDA)に研究員として勤務する。FDAにて新生児の免疫メカニズム解明の研究に取り組む坂井氏に話を伺った。

「日本の方がFDAに働くのは珍しいですね。今のお仕事の内容を教えてください。」

人間の免疫細胞に関心があり、特に新生児の免疫に関する研究を行っています。世界で年間400万人が主に感染症で亡くなっている。新生児はワクチンの反応も弱く持続効果も低い。新生児の免疫が成人と比べてなぜ低いのか、メカニズムを細胞レベルで解明したい。

私の働いているFDAは日本の厚労省と似ていて、新しい薬が商品化される前に承認する機関です。また、企業が提出したデータが申請された通りなのか治療を行う他に基礎研究もや

「以前からこの分野に関心があったのですか？」  
高校のころは物理学が好きで、将来的にはロボット工学をやりたいと思っていました。大学はナノマシンの開発にかかわれたらいいなと思って機械工学を専攻し、日本で修士課程に進みました。そこでは細胞の機能について面白いな、と思い始め機械工学からバイオエンジニアリングの分野へ。当時バイオエンジニアリングの人が生物学をかじる風潮だった。私は、生物学をしっかりとやってみよう、新しいことをやりたい、新しいことをやりたい、と思ったんです。

「米国や英国などの大学院などへ留学生として行かれたんですか？」  
修士の時に、オーストラリアに留学経験があった研究室の先輩が「そういう意識があるなら海外で勉強した方がいいよ」とアドバイスをくれた。ただ周りに海外に行った人がおらず「ど

うやって行ったらいいんだろう？」その当時のMixiというSNSで、MITに行ったら人を探し出し「どうやってMITに行ったのか」聞いてみた。「やる気があるんだら、いろんな人にメールしてみたら？」といわれ、自分の目からうるかが落ちた。面識のない人に「自分はこういうことをしたいので受け入れてくれないか」というメールを送ってもいいんだ、ということがすごく驚きだった。彼に言われるまで考えたことはなかった。それから色々な先生に問い合わせ、MITの先生から「じゃあ、うちにきてやってみよう」と返事が来た。1年間研究させてもらえる機会をもらったのははじまりです。

「ハーバード大学、ケンブリッジ大学と、ご自分のやりたい研究に進まされていますか？」  
MITで所属した研究室は、英語の問題もあつたが、先生とあまり相性がよくな

自分だけ周囲も遅れているというハンデイはあります。でも、他の人がやっていない分野を知っていると、新しい視点を提供できる。自分のモットーは、一度やると言ったことは、なにかしら結果が出るまでやり遂げる、走りきってから考える。結果が出ないうちに辞めるというところはやりたくないんです。

「子供のころはどんな環境で育ったのですか？」  
小学校の頃から転勤が多かったことが自分の「もの」の見方に大きく影響していると思います。新しい所へ行くことへのハードルがものすごく低い。逆にいうと、ひとつのところに長く居ると落ち着かない。大学も「北海道行ってみよう」と決めたし、ボストンや英国も「新しいところに行ってみよう」と抵抗なく行けたのは、

「他人のやっていない分野で新しいことを」  
「他人のやっていない分野で新しいことを」  
「他人のやっていない分野で新しいことを」



研究室で実験している様子

Interviewer: 村上博美 (Murasaki Hiroumi) at Japan Institute for Social Innovation and Entrepreneurship (JSIE). Includes a small photo of the interviewer.

Washington Japanese Language School advertisement. Text: 「ワシントン日本語学校」ワシントン日本語学校は、1958年に創立された世界で最初の海外補習校です。...

博士号は簡単にはとれない。アメリカでは博士号は尊敬の対象であり、博士号取得の過程は長く厳しく、途中でドロップアウトする人も山ほどいる。生物学を学ばず、しかも海外で認められた大学で博士号を取りたいと思ってきた。厳しくても実力主義のアメリカの環境が自分には向いていると思います。